

被災地における 地域コミュニティの再構築

宮城県仙台市若林区 井土まちづくり推進協議会

設立の経緯

仙台市若林区井土地区は、東日本大震災（以下、大震災）により36名の犠牲者を出し、さらに103世帯すべてが全壊という甚大な被害を受けた地区である。災害危険区域からは外れたものの転居する世帯が多く、現在は11世帯21名が暮らしている。

井土地区は市街化調整区域に指定されているため、開発行為には強い規制がかかっており、新しく住民を増やすことが叶わない。少人数による集落自治は困難であり、居住世帯が少ないことによる地区内の荒廃化も懸念されたことに加え、このままでは集落がなくなってしまうのではないか、という危機感もあった。

こうした状況を改めて課題として捉え、暮らし続ける住民も、転居した住民も、ともに同じテーブルで今後の井土のことを考えていこうと、「井土まちづくり推進委員会」（2024年4月より「井土まちづくり推進協議会」に改称／以下、協議会）が2021年7月に地元住民によって組織された。

住民アンケートで見えてきた

「ふるさとに望みたい」

井土地区のまちづくりに向き合うにあたって、2021年9月に井土町内会と共同で、大震災前まで井土地区に暮らしていた全世帯を対象にアンケートを実施（配布：97世帯／回答：78世帯（回答率80・4％）したところ、井

土地区から転居しても「ふるさと」に対する思いは残っており、「またみんなで集まりたい」という気持ちが溢れたアンケート結果となった。これを受けて、協議会では「かつてのように集まりながら、これからの思い描くための仕組みをつくる」ことを目標とし、活動を開始した。

「再び集まり合う」ことを目指して

―大震災後の取り組み

協議会では、2022年から「再び集まり合う」ためにさまざまな活動を実施してきた。これらの活動はすべて、豊かな井土地区の地域資源（豊富な自然資源や農産物、人的ネットワーク、手を貸し合う生活文化、等）に支えら



れたものである。主な活動を以下に紹介する。

①井土アチマルシエ

井土の魅力を楽しめる屋台を並べることで井土地区住民に来てもらい、久しぶりのおしゃべりを楽しんでもらう場として位置づけている。これまで4回開催しており、井土の自慢の一つである新鮮な農作物の販売や自然資源を使ったワークシヨップ、まちづくり活動の展示等、多世代が来て楽しめる場をつくり、気軽に「これから」の話ができる雰囲気をつくることを目指している。

②井土クリーン作戦

震災を機に地区外へと転居してしまった住民が井土に通うきっかけをつくりたいと、



2022年9月に開催した「第2回井土自然環境学習会」の様子。専門家を招き、海辺に群生するヨシの足元に生息するカニの観察を行った。仙台市沿岸地域においてヨシ原を有するのは井土地区だけであり、独特の自然環境を味わうために地区外からの参加者も多くみられた

2022年度から始めた月命日の美化活動である。当初は道路のゴミ拾いが中心だったが、

「昔のように緑のある道にしたい」「彩りのある風景にしたい」と、集会所や津波避難ビルの前を花壇として整備する取り組みも始まった。

③井土自然環境学習会

井土地区には、他の仙台市沿岸部には見られない特殊な自然環境がある。この環境を活かして、農閑期の副業として入会地でヨシの収穫をしていた時期もあった。このような湿地帯での動植物の自然観察会や、宅地跡地の広がる草花を利用した押し花ワークシヨップ、ヨシの新たな活用に向けたアイデア会議の開催等、井土にしかない自然に触れる機会



2022年10月11日に開催した「井土クリーン作戦」の様子。秋休み中ということもあり、平日にもかかわらず小学生の参加もみられた

を専門家との協働のもとに創出している。

④「井土まちづくりレポート」

井土地区で行われているさまざまな活動を周知するために発行している情報紙で、これまで22号発行している。活動状況を継続的に発信していくことで、イベントへの参加やまちづくりへの参画につながることを期待している。

活動をとおして得られたまちづくりへの効果

◎活動の定着化

今年で3年目を迎えた「井土クリーン作戦」



2023年4月に行った「第1回井土のこれから大会議」の様子。集まって楽しむだけでなく、井土のこれからのまちづくりの話を多世代で行うために実施。各テーブルで議論が盛り上がり、この時のアイデアをもとに協議会の活動の充実を図っていった



2023年8月に開催した「第4回井土自然環境学習会」の様子。農学博士である向井康夫氏を迎え、井土の集落部に生えている夏の草花を題材に、その種類を学びながら、押し花をつくるための素材集めを行った。震災前後で植生が変わったという地区住民の証言もあり、向井氏によるさまざまな考察を聞きながらフィールドワークを行うことができた

については、「11日に集会所前に集まる」という新しい習慣が住民間に根付いてきた。「井土プチマルシェ」では毎回300名を超える来場が地区内外からあり、来場者からは「久しぶりにふるさとの人と話ることができるこの日がとても楽しみ」という声が聞かれ、「住民同士で集まって語らう」という目的が達成されている。

◎多様な外部関係者との協働の実現

継続的に活動を展開してきたことで、井土の地域資源に興味を持った学生団体やアーティスト、施設運営者等とつながることがで

きた。さらに、井土プチマルシェや自然環境学習会の場において、地区住民は経験知を、外部関係者は専門知を出し合いながら協働する場面をつくることができた。

◎新しい活動への波及

「ふるさとにふたたび集まり合う」ことが定着化してきたことで、まちづくりの話を多世代でじっくり行うための集会「井土のこれから大会議」が開催できるようになった。また、こうした話し合いを踏まえて、2024年3月には向こう3年間の取り組み目標を示した「井土まちづくり計画2024・2026」を策定した。

これらは2021年当時には考えられなかったことで、協議会としてもこうしたまちづくりの話し合いができる場を設けられたことには、大きな手応えを感じている。

井土地区は、住民同士が集まることでさまざまなアイデアが共有され、次のまちづくりの布石になることが多々ある。このことから、「集まる」という機会を創出し続けることは井土地区にとって重要なことであり、震災前の暮らしでは当たり前だった習慣を取り戻せたことが、これまでの成果であると実感している。

（井土まちづくり推進協議会事務局員／

東北芸術工科大学講師 田澤絃子）



2023年9月11日に開催した「井土クリーン作戦」終了後にくつろぐ参加者たち。現代美術家の川俣正氏によって集会所の軒下にベンチが設置され、夏場の休憩所が地区内に誕生したばかりで、さっそく活用されている場面



2023年8月に開催した「第2回井土プチマルシェ」の様子。猛暑の中での開催ではあったが、たくさんの来場者に恵まれ、住民たちは再会に歓声を上げていた